

「第8回自治体戦略2040構想研究会」 発表資料（平成30年2月23日）

明治大学政治経済学部准教授

飯田泰之（いいだやすゆき）

 @iida_yasuyuki

日本経済の課題は何か

アベノミクスと日本経済

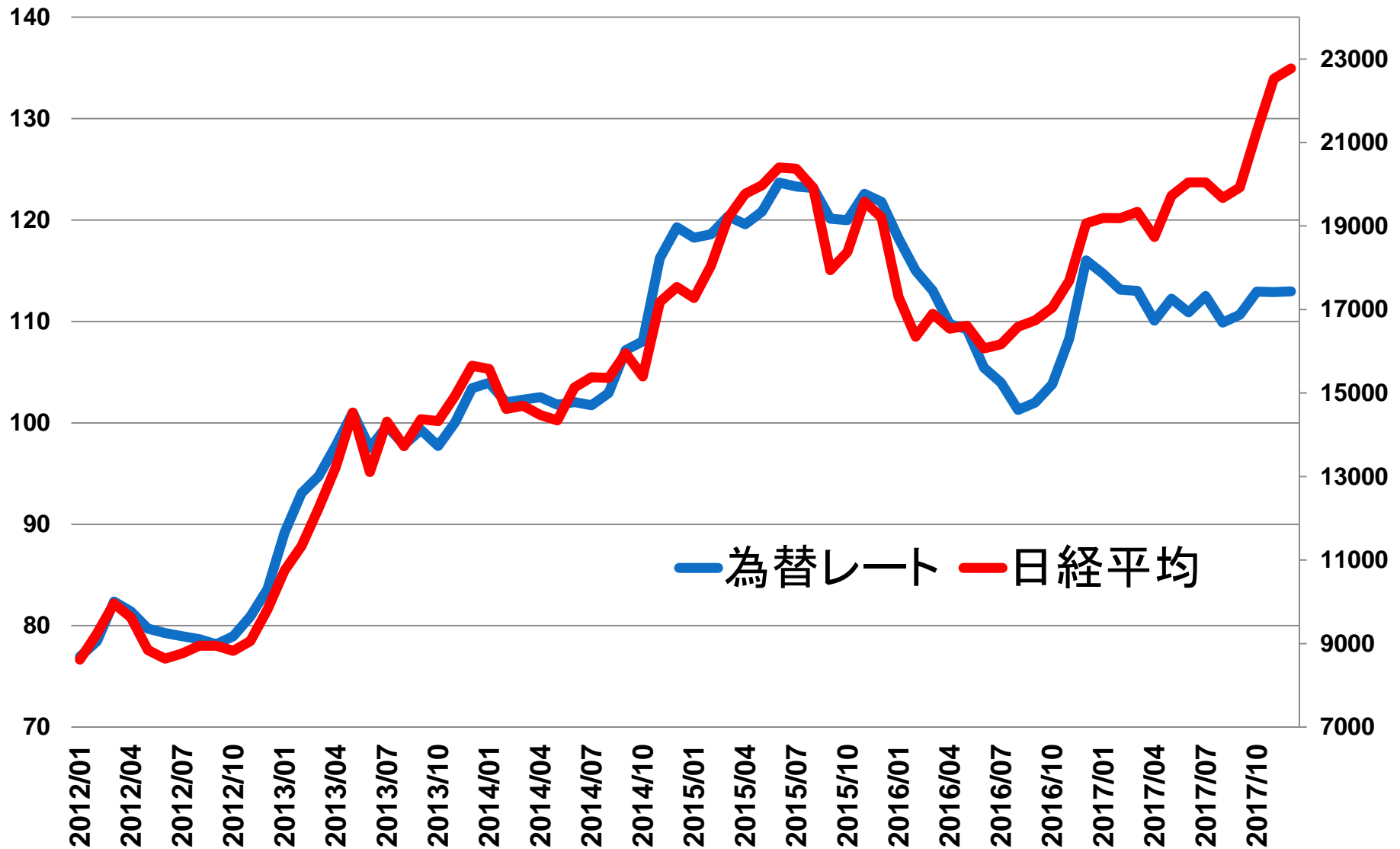
◆アベノミクスの嬉しい誤算

- ~~政策が想定通りの効果を発揮しなかった~~
- ~~日本経済の潜在能力を低く見積もりすぎていた~~
→マクロ経済学のショートサイド原則

◆日本経済のリスク

- ~~グローバル化と構造改革の遅れ~~
- 国内外における緊縮主義の復活
- 「東京一極集中」と「均衡ある国土の発展」はともに誤りである

為替と株価の動向



日本の「景気」の現状は？

◆ 日本特有の「景気」という概念

- 「Business Cycle」「景気循環」とイコールではない
- ← 国際的な定義(専門家内の定義)では現在の日本は確かに景気が良い

◆ 日本語の「景気」は主観的側面が強い

- 資産家: 株価・地価の上昇
- 経営者: 企業収益 + 物価水準の上昇
- 労働者: 一般社員の給与上昇

→ 資産家○ 経営者△ 労働者×

マクロ経済のショートサイド原則

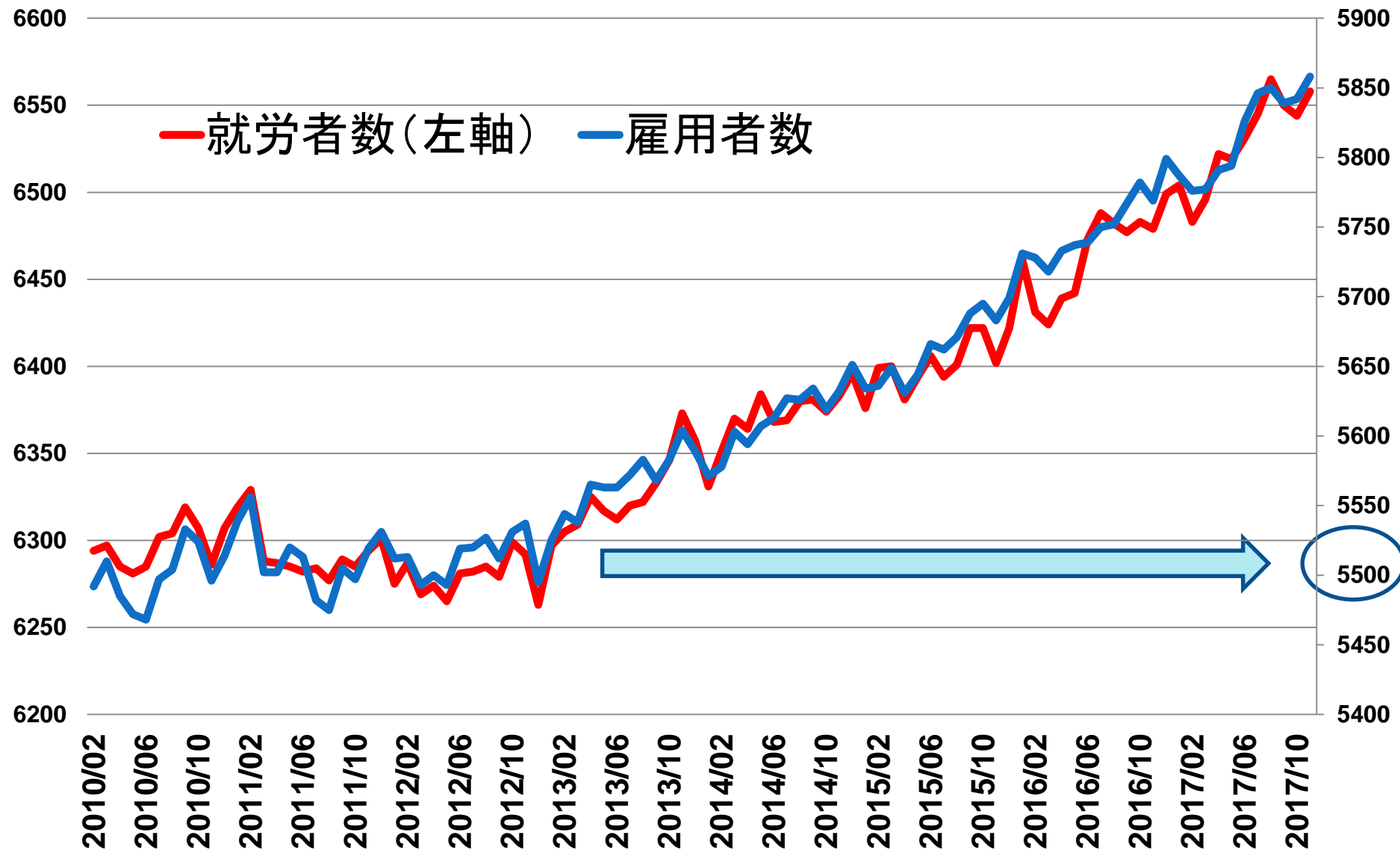
◆現実の生産・所得は

- ▶ (有効)需要と供給(能力)の小さい方から決まる
- ▶ マクロ経済における需要: 有効需要
- ▶ マクロ経済における供給: 潜在生産力

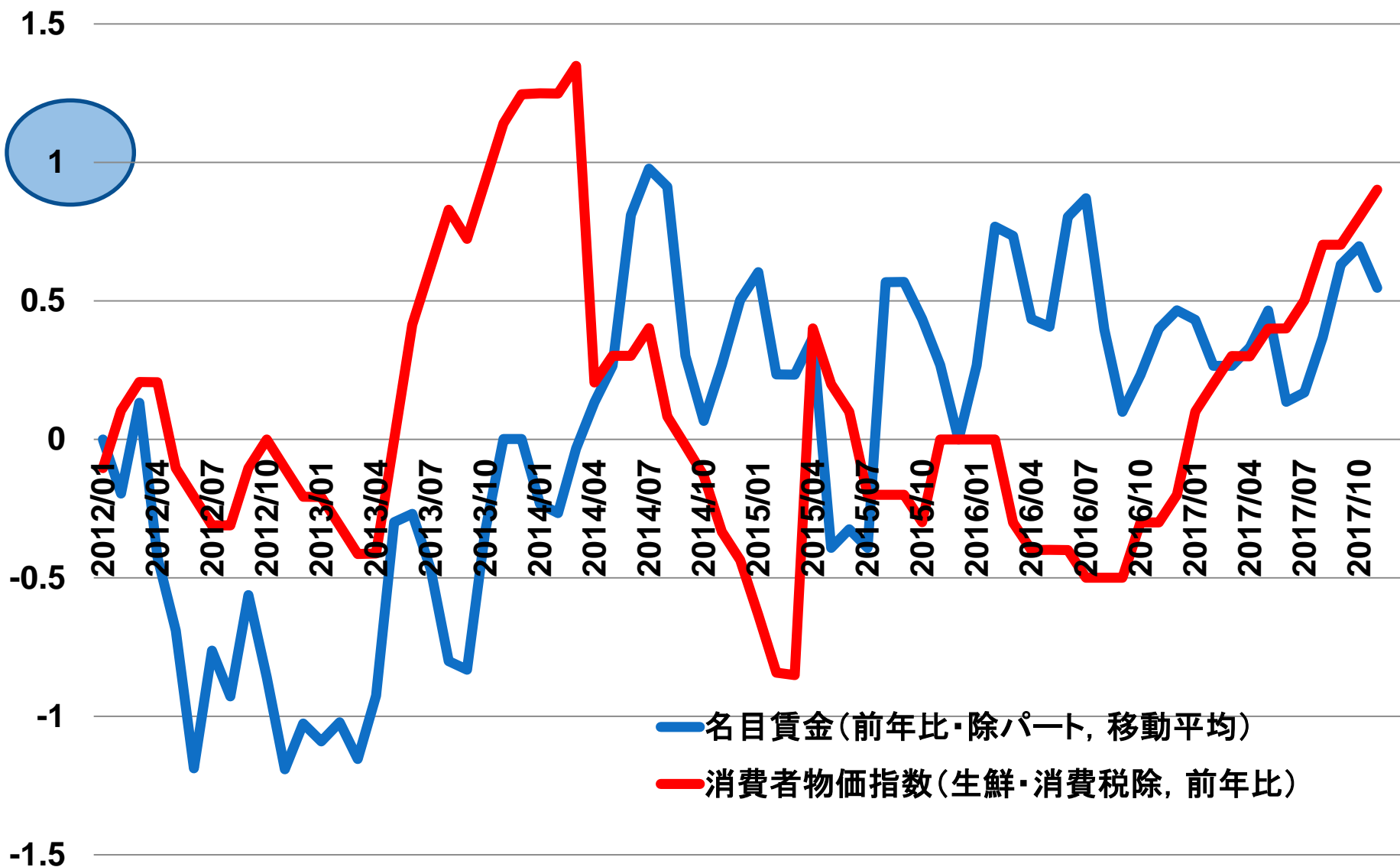
◆労働力の「天井」は意外と高かった

- ▶ 人手不足→賃金上昇→消費増→脱デフレのために金融緩和の手を緩めてはいけない
 - ▶ 財政政策の発動を検討すべき
- それ以外にも重要なポイントがある！

雇用・就労者数の反転増加



賃金と物価の動向



人口減少と経済成長

◆人口減少悲観論は悲観が過ぎる

➤高度成長期日本の10%成長分解式

=人口要因1.5 + 設備要因2.5 + 生産性6

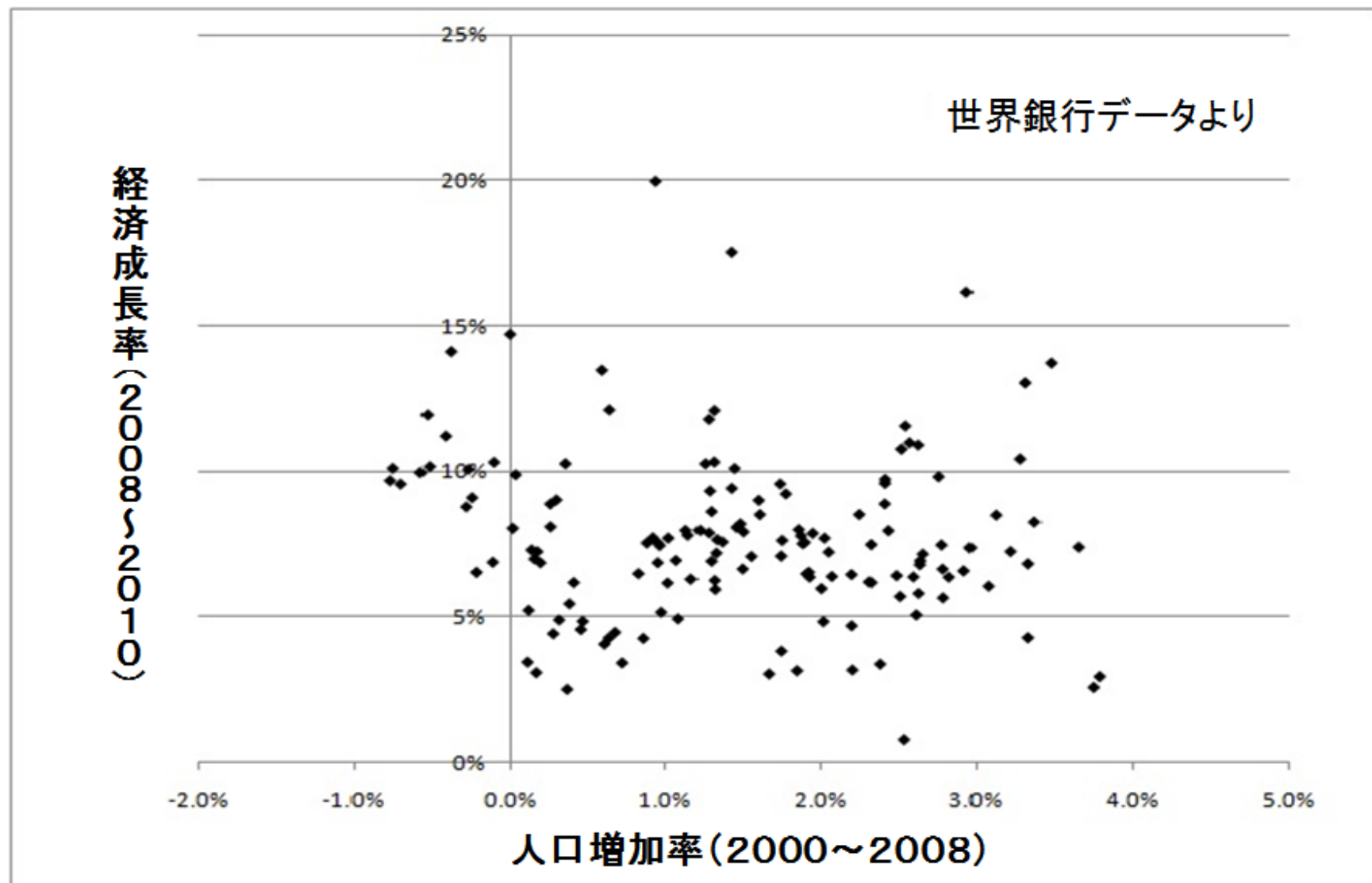
➤2030年代における人口減少は年率1.5%

→高齢者・女性の労働参加率上昇によって、「働き手」そのものの減少は1%程度

➤1%の人口減少の経済成長率低下効果は0.65%

∴喜ばしいことではないが、絶望的ではない？

人口増加率と経済成長率



高圧経済 (High-Pressure Economy) 論

- ◆ 「人手不足」圧力が経済を成長させる
 - 産業革命がイギリスで始まった理由
 - 省力化投資によるIoT, AIの「使い道」の発見
 - 新技術の良きユーザーを育てる
 - 世界的人口減少化で日本の競争力を形成
- ◆ 「人手不足」圧力が日本を変える
 - 転職が容易な環境では「労働力の再配置」が容易になる.....経済成長は「移動」から生まれる
 - ∴ 労働市場改革がこれからの経済のカギとなる

経済成長は
「移動」から生まれる

2030年の活力ある日本経済のために

◆需要が供給を創造するという視点

➤資本主義の非物質的転回

＝生存のために消費しているわけではない

∴物的な生産能力ではなく、新たな「スタイル」「楽しみ方」を提供することこそが「供給」である

→必要はアイデアの母となる

◆供給（生産性・効率）の向上

➤アイデアを実現する力のある企業とそれを育む地域がこれからの経済成長のキーとなる

生産性の正体

◆現代の経済成長の主役は「生産性」

◆生産性≠発明・発見・技術導入

➤日本の就労者の7割は第三次産業に従事

➤差別化優位競争下での製造業のサービス化

→基本に立ち返ろう

生産性とは「人」の発揮する「能力」である

←個々人の能力向上のことではない

「人」の発揮する「能力」が重要である

「動く」成長【古典的成長】

=より高い生産性を発揮できるポジションに移動することにより平均的な生産性は向上する

例) 伝統部門から近代部門への人口移動

◆現代における古典派的成長の芽

➤山から麓へ／東京近郊から地方都市へ

➤人材を動きやすくするための規制緩和(退職金優遇制度の見直し, 年金のポータビリティ), 全国規模での移住・移転補助税制

※動く成長をさらなるイノベーションに接続

「出会う」成長【新内生的成長】

- ◆ 企業間・地域間で人が動くと人と人が出会う
 - 出会いがアイデアを生む (Connecting Dots!)
 - アイデアは下手な鉄砲数撃ちや当たる方式
 - 「動く」が増えると「出会う」が増える
 - ◆ 誰と出会うとアイデアは生まれるか
 - 寛容さが多様性を引き寄せる
 - Skill多様性＋フランクなつながり(弱いつながり)
- ダイバーシティ経営は「絵に描いた餅」?

親しむ成長【内生的成長】

◆イノベーションの第二段階

▶ アイデアを製品化し販売し資金回収する

▶ 強いつながり・チームの必要性

＝トランザクティブ・メモリが実現力を高める

◆無形の効率上昇が現代的な効率向上の源

▶ 安定的な雇用は成長戦略である

▶ ベテランの力を過小評価してはいけない……外部人材が多くなるほど・メモリ・マンが必要

イノベーションを生み出すシステム

←イノベーションを生み出す「移動」を

◆イノベーションの第一段階＝アイデア

- ▶ 人と人との「弱いつながり」が重要
- ▶ 組織内にskill多様性を保つ＋外部との交流

◆イノベーションの第二段階＝現実化

- ▶ 具体化・利益かされてこそ「イノベーション」
- ▶ 「強いつながり」による効率的な実行が必要

cf) 日本型男性社会はなぜ生まれたか

矛盾する目標の達成には地域が必要

- ★「動く→出会う」成長の活性
→長期的関係による「親しむ」を損なう可能性
- ★リアリティあるダイバーシティ経営が必要になる

動く成長

- ◆企業・地域間で人が動くと「出会い」が生まれる
- ◆「異なるスキル」の人間が出会うとアイデアが生まれる

- アイデアを現実にするには長期的関係が必要

親しむ成長

出会う成長

地域経済の再生が
日本経済の生命線である

「地域収支赤字」のもたらすモノ

◆地域収支＝地域間の「移出一移入」

- 赤字の場合は資金・資産流出で地域経済縮小
- 人口流出による「赤字の解消」or財政平衡

cf) 同一通貨圏欧州の苦惱

◆財政平衡＝公的セクタの拡大

- 地域の人的資本が官と関連業種に集まる
- 役所は「儲けること」が苦手(嫌い?)

∴民間セクタ自身が「稼げる」ようになる必要

地域経済はなぜ赤字なの？

- ◆「地域外から買っているモノ」は何か？
≡「東京都が域外に売っているモノ」は何か？

東京都からの移出総額	54兆3719兆円
1位 本社機能	21兆0105兆円
2位 情報通信	8兆9680億円
3位 商業	8兆8216億円
4位 対事業所サービス	6兆8121億円

- 工場誘致・チェーン店は域内収支を改善しない
＝戦略・企画・デザイン・ブランディングの内部化

注意：規模の逡増性・一定性・逡減性

- ◆ 収穫逡増経済 = 大きいことはよいことだ
 - 固定費用の存在
 - 本源的な規模の経済
 - ◆ 収穫一定経済（初歩的な製造工業等）
 - ◆ 収穫逡減経済 = 人が少ないほど儲かる
 - 農林水産業・観光業などの「場の資源」産業
 - 分母の減少が一人あたりのパイを増大させる
- エリアによってタイプが違ふ

収穫逓減経済の好循環

◆人口減少は所得増を招く？

- 人口減＝一人あたりの「場の資源」増
←固定費（行政費用）抑制で平均所得増加へ
＝「場」の喰わせられるサイズを捜していく

◆稼ぐためのアイデアを移入する

- 地域住民の「地域外との弱いつながり」
- 「弱いつながり」をもつ人を引きつける里
- 近隣中心都市の繁栄は最大の力（マーケットとしてだけではない）

3つの成長を同居させる

- ★「動く→出会う」成長の活性
→長期的関係による「親しむ」を損なう可能性
- ★リアリティあるダイバーシティ経営が必要になる

動く成長

- ◆企業・地域間で人が動くと「出会い」が生まれる
- ◆「異なるスキル」の人間が出会うとアイデアが生まれる

- アイデアを現実にするには長期的関係が必要

親しむ成長

出会う成長

収穫逡増地域における3つの成長

◆成長の起点としての【動く成長】

➤人が動くことに成長の起点がある

→単なる人口増では「次のステップ」に進めない

◆発展の肝としての【出会う成長】

➤多様性ある人材プールを持つ地域の形成

→【動く成長】へのフィードバック

◆既にある強みとしての【親しむ成長】

➤重層的ネットワークは地域経済の強み

←元々ある強みを失わない「地元力」の必要性

地域企業版ダイバーシティ経営

◆ダイバーシティ経営

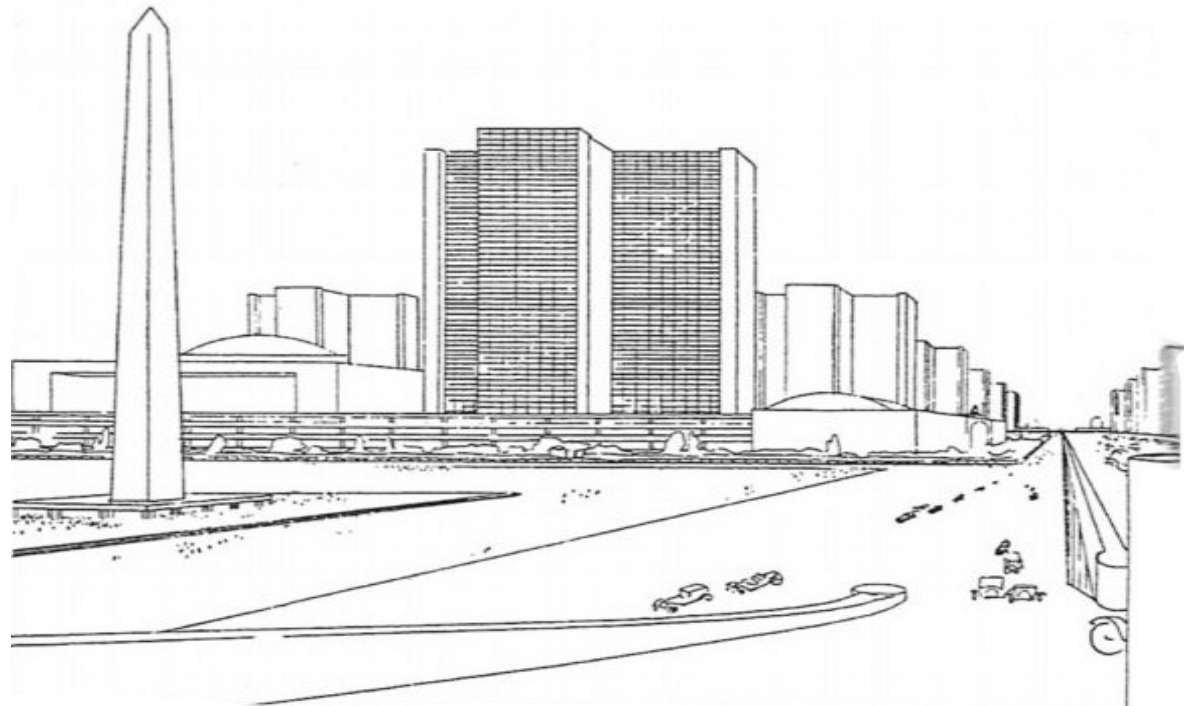
- ▶ 多様性ある採用で社内の「出会う成長」を最大化
→ 多くの企業にとって短期的には不可能
+ 中堅・中小企業ならばなおさら

∴ 多様性との弱いつながりは地域に求めよう

- ▶ 余裕ある勤務 + 副業・地域貢献促進によって社員の弱いつながりの構築を支援
- ▶ 多様性を招く寛容な地域 / 人を引きつける魅力ある都市を構築する必要がある

参考: コルビジェの『輝く都市』(1947)

- ◆ 太陽・空間・緑の配置
- ◆ 住宅の延長として施設整備
- ◆ 歩車分離



参考: ジェイコブスの四条件

- ◆ 街路の幅が狭く、曲がっていて、一つ一つのブロックの長さが短いこと
- ◆ 古い建物と新しい建物が混在すること
- ◆ 各区域は、二つ以上の機能を果たすこと
- ◆ 人工密度ができるだけ高いこと

『アメリカ大都市の死と生』(Jane Jacobs 1961)

都市のふたつのコンセプト

◆コルビジェ型中心市街地

- ▶ 効率による縦の比較が可能
- ∴ 地方で一番の街しか生き残れない？
- ▶ 政策的な設計・計画になじみやすい

◆ジェイコブス型中心市街地

- ▶ 横のバラエティのため比較困難（差別化容易）
- ▶ プレイヤーの能力に過度に依存した街づくり
- ∴ 都市におけるリーダーとリーダーグループを育成していく必要性

ジェイコブス型市街地を生み出すために

- ◆既存の商業地区を「小さく再編」
 - ▶エリアを集中させて「歯抜け状態」を解消する
＝歩ける街・歩いて楽しい街への再編
- ◆新築ではなくリノベーションを軸に
 - ▶高家賃物件は全国チェーン中心の店舗構成に
 - ▶小予算・小面積・区分化による「小商い」誘致
- ◆大規模ビルより中規模非住宅CLT建築へ
 - ▶主伐期の日本の林を活かしたまちづくり
(現時点ではコスト・規制面で発展途上)

ご清聴ありがとうございました